



栃木精工（栃木県栃木市）は終戦直後から金属パイプや注射針を製造してきた。川嶋大樹社長は3代目。管のことなら何でも請け負う「管屋（くだや）」を自称し、幅広いニーズに応えるニッチ企業を率いる。「オヤジがまた種が実った」と謙遜するが、社長に就いてから増収増益を続け、「100年企業を目指し

# 管のことなら何でも

栃木精工社長

川嶋 大樹氏



かわしま・ひろき 1978年生まれ。2005年3月東京工業大学大学院（分子生命科学専攻）修了後、同年4月に東京都内の製薬会社に入社。06年栃木精工に入社。10年6月から社長。39歳。

たい」と意欲を燃やす。病弱で戦地に行けなかつた引け目から、健康や福祉に役立つ事業を目指していた創業者の祖父が着目したのが注射針。針の使い回しが社会問題になるやいなや、使い捨て針の製造に乗り出した。マーケットリーダーになり、輸出比率が一時9割

を越えて国から表彰されるほどだった。ところがプラザ合意後の円高で月に1億本を生産していた注射針の輸出から手を引くというある「社員を頼む」と急ぎよ呼び戻された。

「3人兄弟の次男で、家業を継ぐとは想定していなかったが、父が病に倒れ、

## 医療テコに海外再挑戦

社長就任後は「月並みだけど、地域でいちばんいい会社になりたいと考えた」という。部門ごとの損益を全社員に開示し、どう働けば自分の給与がどの程度増えるか「見える化」した。

地域経済を活性化させるけん引役として経済産業省が選定する「地域中核企業」に応募した際は、夜を徹して作成した分厚い資料を社長自ら県庁に持参。県内で多くを仕入れ、付加価値を高めて県外に販売する点が高く評価された。

2年前に栃木県小山市に産業用製品の製造拠点となる工場を開設し、2017年末には本社の新工場が完成。20億円を超

える投資で、受注増への備えも怠りない。売り上げの7割は医療向けだが医療機器のニーズは細分化し、どうしても少量多様になる。それでも無理に利益率を追求とはしない。「協力企業との共存共栄がいちば

医療分野を軸に遠ざかっていた輸出にも再挑戦する。中国人女性を正社員として採用するなど、東アジアへの進出をならむ。管の専門メーカーとして幅広い商品群を武器に、海外で改めて知名度を高めていく考えだ。

（宇都宮支局長 花刈敏）